

Vol. 5, 37.

- 12) 川崎英男, 1959: 季節風下の「浦潮一教賀」間の海上気象について, 山陰の冬期季節風協同調査研究総合報告, 舞鶴海洋気象台.
 13) 中央気象台, 1944: 航空気象図.

参考資料

- 14) 和達清夫監修, 1958: 日本の気候, 東京堂.
 15) 気象庁, 1962: 日本気候図の二.
 16) 中央気象台, 1942: 本邦気候図.
 17) ———, 1941: ロシアの気候概説.
 18) 日本海の家象, 1944: 海象彙報24号.

- 19) 函館海洋気象台, 1958: 日本近海平均表面水温——一般般船による1911-1940年の統計, 海洋報告第7巻第1号.
 20) U.S. Weather Bureau. 1952: Normal weather chart for the northern hemisphere.
 21) 富山県水産試験場, 1954-1959: 対馬暖流調査報告.
 22) ナホトカ航路気象報告, 宝光丸(山下汽船), 第二満寿美丸(山下汽船), 第二房島丸(国光海運), 明峯丸(丸ノ内海運), 第一真盛丸, 陽心丸.
 23) 気象研究所, 1963: 北陸豪雪特別観測資料(付録).

日本気象学会昭和40年度

総 会 議 事 録

日 時 昭 和 40 年 5 月 12 日

場 所 大 阪 府 厚 生 会 館 講 堂

出席通常会員 143 名, 書面参加者および委任状総数 273 名,
 以上総数 416 名.

4月1日現在の通常会員198名で, 上記の出席者数は定款第36条による通常会員数の1/5以上, 書面参加および委任状によらない出席会員数は通常会員数の1/25以上の条件を満たしているため総会は成立.

議長は出席会員の互選によるものであるが, 司会者に一任されたので, 大会委員長間野浩会員を推すことになり, 満場一致で決定された.

なお総会に先立つて, 大阪府知事および大阪市長よりあいさつがあつた.

以下総会の内容は次のとおりである.

(1) 理事長あいさつ

(北岡理事代読)

緑香る五月, 浪速の地において, 久しぶりに, 昭和40年春の総会を開くことは誠に喜ばしく, 本会の開催にご尽力下さった間野台長はじめ, 大阪管区気象台の皆様へ厚くお礼申し上げます. わたくしも参加すべきところ病気のために欠席致すことは皆様に相すまぬと同時に残念に思います.

さて, 現在は気象学の著しい発展期であります. 気象ロケット, 気象衛星等の新しい測器の実用化が緒につき, 電子計算機の大型化が必要になり, その他種々の新しい測器や, 数値実験という新しい研究方法が生まれました. このように器械や方法は新しい発展をしつつあります. しかしこれを運用する気象界の体制は旧態依然の感が深く, 他の分野の発展をみると, 立ちおくれを感じます.

気象学会の長期計画は2・3年前より始められ, 新潟, 福岡大会でも討議されたようです(2回共わたくしは海外出張と病気のため欠席). この春の総会において決議して頂く予定ですが, 4月に日本学術会議の春の総会で長期計画の件が議題になり, この機会を失うともう機会がないとのことであつたので, 地球物理学研究連絡委員会気象分科会および気象学会理事会の名で提出しておきました. 気象学会内の一層の討議および決議をお願いします. このくわしい事情は委員が説明します. 要するに学問の進歩, 技術の開発, 社会の要請の増大に応じて気象界も進歩しなければならないのです. そのためには組織・体制は, 学問技術の進歩に追従しなければなりません. 気象学の現状を見るとき, まず研究者層の薄いことを痛感するのであります. 一問題に一人あてたら, ちらちらにもこちらにも大きな穴ができると思います. 現在は一人で何役もやり, 穴には目を閉ざしている状態です.

今の状態でいけば、日本の気象学研究は先細りになり、翻訳のみになってしまうでしょう。長期計画委員会案も完全ではないかもしれないが、この欠陥をうずめるのが主旨ですから、皆様の好意ある御討議をお願い致します。

昨年、福岡大会の頃から私は健康を害しましたので、今回、理事長の重責を解いて頂くよう、理事会にお願い中であります。任期の途中で交代するのは、申し訳ないことですが、了承願います。健康が回復したい何等かの形で、日本気象学会に喜んで役にたちたいと思っております。以上ごあいさつまで。

昭和40年5月12日

日本気象学会理事長 正野重方

(2) 学会賞藤原賞授賞

本年度の学会賞を授与するにあたり、北岡理事長代理から、別紙(196頁参照)の推せん理由の紹介があり、満場の拍手のうちに、樋口敬二会員に賞状、賞牌ならびに副賞が授与された。

つづいて本年度の藤原賞の授与にあたり、別紙(196頁参照)の推せん理由の紹介があり、満場の拍手のうちに、山本義一会員に賞状、賞牌ならびに副賞が授与された。

(3) 昭和39年度事業経過報告

安藤理事

わたくしどもが、第13期の学会理事として就任いたしました。ここに1年、いろいろの事業事務を執行してまいりましたが、その中でもっとも大きなものが2つございました。その1つは国際雲物理学議の開催のための準備であり、他の1つは気象学の長期計画の樹立であります。

国際雲物理学議の準備経過につきましては、その都度天気誌上で発表してまいりましたので、大略はご承知のことと存じますが、主要な点につきましてご報告いたします。

今回日本で開催されます国際雲物理学議は、IAMAP(国際気象学及び大気物理学連合)の提案によって、雲物理学開催の国際会議の開催と、この分野での国際研究協力を促進するために設けられたAd Hoc Committee on Cloud Physics and Modification(雲物理特別委員会)の主催による第1回の国際会議であります。この会議が日本で開催されることが決定されて以来、日本国内においては、当学会を中心とした島山久尚前気象庁長官を委員長とする組織委員会を設けて昨年1月以来鋭意

その準備を進めて参りましたが、6月にいたってIAMAP WMO・日本気象学会・日本学会会議の4者主催で開催することを決定し、7月以降そのアナウンスを世界各国に行き参りました。さらに9月には国外国内の雲物理学者および気象学者に招待状を発送しました。その間事務の強化をはかるため、気象研究所長大谷東平博士を局長とする事務局を設け、8つの班によって講演、財務、経理、設営、接待、会場、渉外、庶務などの事務を処理して参りました。

以上の結果会議への出席者、論文発表の申込は、当初の予想をはるかに上廻り、1961年のオーストラリアの際の60名の2倍以上の参加者が予定され、質量ともに従来に見られないすぐれた研究の発表討論が期待されております。

わたくしどもは、この国際会議を成功させるために、募金その他あらゆる努力を傾注して参りましたが、開催を目前に控えまして、会員諸氏の一層のご協力を切にお願いするものであります。

気象学の長期計画の樹立にあたりましては、委員会を設けてその草案の起草にあたり、昨年秋に第2次草案の作成をみたのでありますが、さらに万全を期するために秋の福岡大会でその討議を行い、数次の検討をへて、第3次草案の完成をみました。本日その草案を検討願ひ気象学会としての長期計画の正案としたいと考えております。くわしくは議題の審議の際の説明にゆずりますがこれは今後少なくとも10か年間に、気象学のあるべき姿を描いたものでありますので、慎重に検討をいただきたいと考えております。

その他、大会、例会のほか、一般の研究発表の場を与え、気象学の研究を促進する意味で、年2回の講演会を開催することいたしました。この春にその第1回の講演会を催しましたが、いまだ趣旨の徹底を欠いたためか、十分にその目的をはたしていないうらみがあります。今後その趣旨をよく徹底させるとともに、会員のご協力を得て、この講演会が所期の目的を果すように努力してまいり度いと思っております。

次にご報告申し上げなければならぬことは、気象学会の理事長を正野重方博士から島山久尚博士に替っていただくことになりました。

さきの理事長のあいさつにもありましたように、正野理事長には昨年の春以来健康をそこねられ、再三理事長の職を退きたいのご意向がございましたが、その都度ご留慰を願って今日まで参りました。しかしご健康もさら

にすぐれないご様子なので、この際全国理事会にはかり、理事長のご退任を認めた次第であります。さいわいに畠山博士が替ってご就任を願えるはこびとなりましたので、新理事長の下にわれわれはさらに学会運営に努力を重ねたいと存じている次第であります。なお交替は本大会以降にいたす考えであります。

また昨年夏中国の北京で行われました北京シンポジウムには、当学会から小平、増田両会員が出席いたしました。これを機会に一層両国の学術交流が盛んになることを願うとともに、ご寄付やご協力をいただきました会員諸氏に、ここで厚くお礼申し上げます。

その他本日の総会におきましては、定款、細則などの改正を、審議願う予定でございますが、その際趣旨を説明いたす通り、学会の運営をさらに円滑に進めたい意向に他なりませんので、慎重ご討議を重ねてお願いする次第でございます。

以上をもちまして、簡単ではありますが、39年度の事業経過報告の説明といたします。

(4) 昭和39年度会計決算報告ならびに監査報告

桜庭 理事・高橋(浩) 監事

桜庭会計担当理事から、別紙2(216頁参照)のように昭和39年度会計決算報告があり、つづいて高橋監事から同決算に対する監査を実施した結果、おおむね良好であるとの報告があった。両報告を一括して、会員にはかった結果、全員異議なく可決された。

(5) 昭和40年度事業計画ならびに予算案審議

桜庭 理事

別紙3(表紙3頁参照)のような昭和40年度予算案について桜庭理事から説明があったが、その内容は次の細則の一部改正に関連するので、細則の改正を先議した結果、両者一括して会員にはかった所、賛成多数で可決された。

(6) 定款ならびに細則の一部改正に関する件

安藤 理事

安藤理事から、総会の議題としては、1「外国会員の設定に関する事項」と、2「気象集誌だけを希望してい

たA会員のB会員へのふり替に関する事項」の2点が提出されているが、1の事項は全国理事会の諒承がえられないので、今回は撤回する旨の説明があった。したがって本総会には、細則の一部改正として、2の項目だけを議題として会員にはかった所、賛成多数で可決された。

その結果細則の一部は次のように改正された。

「第15条 本会は機関誌として気象集誌および天気を発行する。(ただし学会運営上に必要な事項は、すべて天気に公示する(以下略))」

「第17条 名誉会員、団体会員および通常会員のうちのB会員には、天気および気象集誌を無償で配布し、通常会員のうちのA会員には、天気を無償で配布する。団体会員のうちのA会員には、その希望に従い天気または気象集誌の何れかを無償で配布する。」

(7) 気象学の長期計画に関する件

吉野 理事

天気2月号所載の第3次草案について、骨子を吉野理事から説明し、この案の趣旨について会員の諒解を求めた所、賛成多数で可決された。よって第3次草案は、日本気象学会の正案として採択された。

(8) 境界層と乱流に関する国際シンポジウムに際して気象学会で講演会を開催する件

岸保 理事

来年度(昭和41年)9月京都で行われるBoundary Layerのシンポジウムは、出席者に制限があるので、これに先立って東京でオープンの講演会を当学会で開催したい。なおこれに伴う経費は、特別な措置はとらず、通常会計の許す範囲内で行う旨の説明があったが、採決の結果全員異議なくこの件は諒承をえた。

(10) 事年度の当番支部に関する件

安藤 理事

来年度(昭和41年)の当番支部としては、東京大学にお願いすることになったが、主催の衝にあたる正野理事長の健康状態によっては、変更があるかも知れない旨の説明に対し、全員異議なく諒承された。